

第12回資料紹介展

絵図にみる吉野川

1996.5.8-1996.8.4



徳島県立文書館

〒770 徳島市八万町向寺山 [文化の森総合公園] TEL(0886)68-3700

ごあいさつ

今回、第12回資料紹介展(企画展を含めて通算第23回展示)として「絵図にみる吉野川」展を開催することにいたしました。

吉野川は、伊予と土佐の国境をなす瓶ヶ森周辺より流れ出し、土佐国内を50キロほど流れて阿波に流入します。阿波では最初は北方に向かい、池田町からは東流し最後は紀伊水道に注ぎ込みます。

この四国最大の大川は、県面積の半分を流域とし、阿波国旧10郡中7郡を貫通して豊かな水を供給するにとどまらず、讃岐にも分水をしています。また、自ら運んできた流土によって、郷土の象徴的産物である「阿波藍」を育ててきました。

このように自然・経済はもちろんのこと、政治や文化などにおいても吉野川は多大な影響を、有史以来わが郷土徳島に与え続けて来ました。

最近また、第十堰の改築問題を契機として、吉野川に対する関心は急激に高まっております。

阿波の人々は、日常生活に大きな恵みを与えるとともに、時にはとてつもなく大きな災害をもたらす大河に無関心でいることはできず、絵図をはじめさまざまな情報を収集・蓄積してまいりました。このうち、展示は絵図を中心に紹介するものであります。

今回の展示に際し、資料の貸出・複写などに御協力をいただきました正倉院(宮内庁)・国立史料館・徳島大学・徳島大学地理学教室・建設省徳島工事事務所・徳島城博物館・小松島市教育委員会の諸機関および蜂須賀弘行氏・山田喜昭氏に対し心からお礼を申し上げます。

また図録の作成に全面的に御協力をいただきました徳島大学の平井松午・藤田裕嗣両先生には、企画の段階から御指導を仰ぎました。ここに謹んで感謝の意を表します。

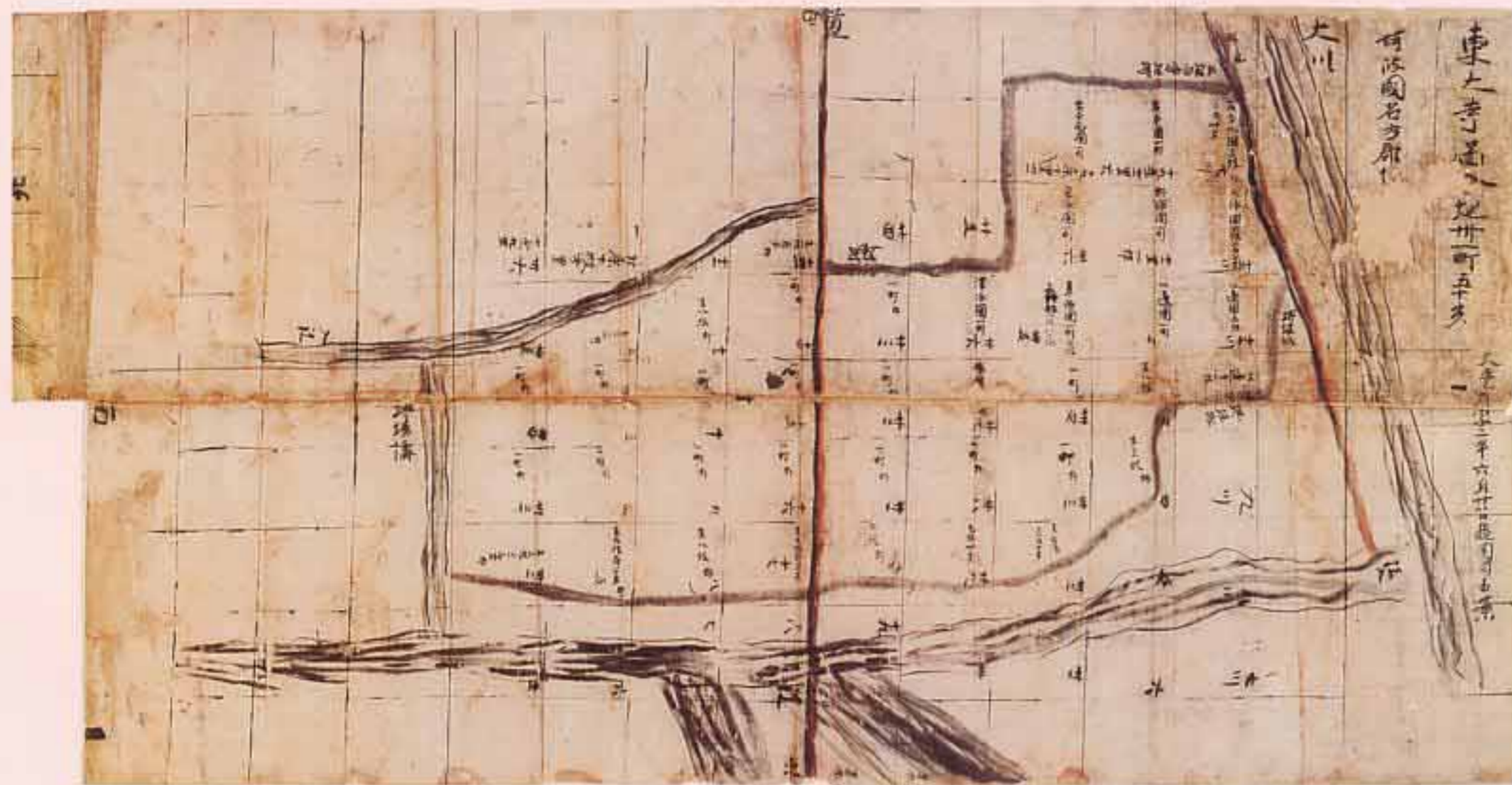
平成8年5月8日

徳島県立文書館長 大 和 武 生



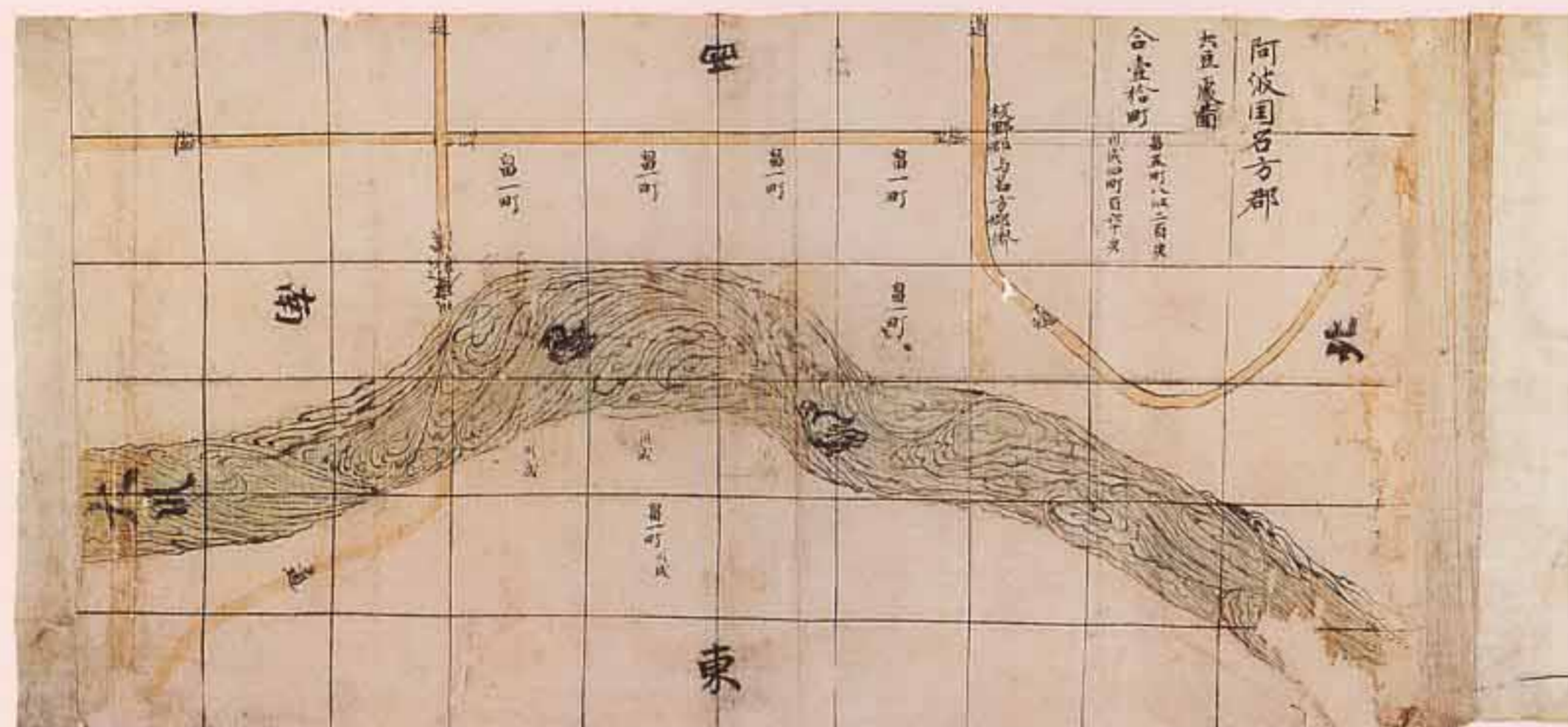
正倉院の阿波国絵図

絵図に描かれた最古の吉野川



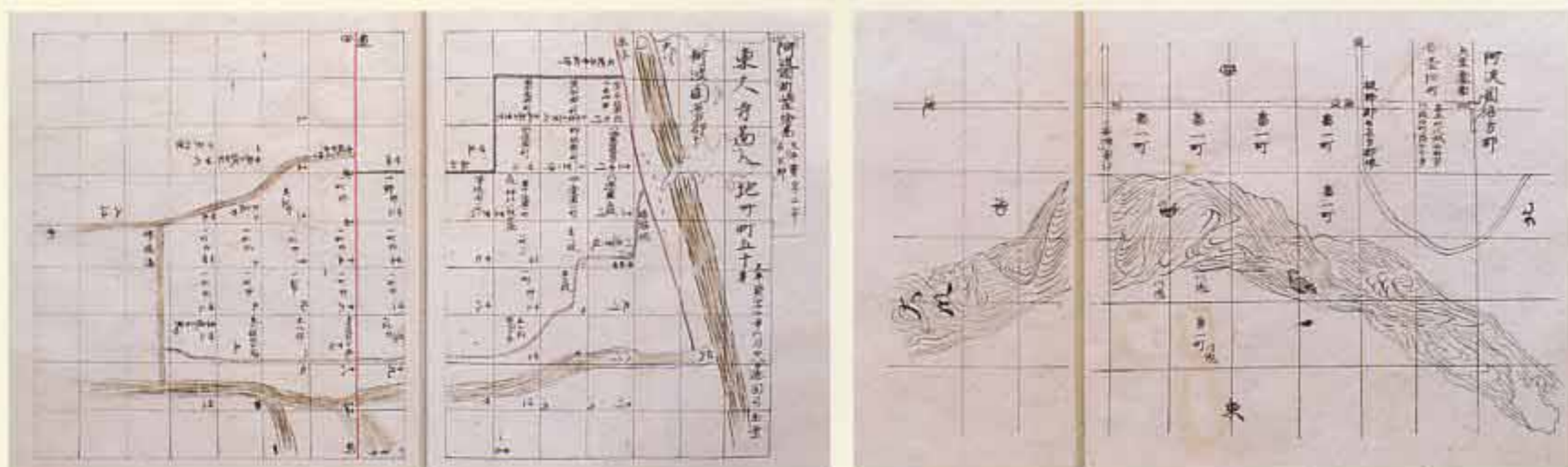
① 阿波国名方郡新嶋庄図 【写真/徳島大学総合科学部蔵, 原本;57cm×103cm/正倉院蔵】

天平宝字2年(758)6月28日との年紀が右端にあり、徳島県を描いた地図では最も古い。「東大寺図入地卅一町五十歩」とあるように、奈良・東大寺領とされた31町(約31)を中心に描いている。全体に引かれている1マスの面積が1町であり、1マスごとに現在の地番に当たる番号が付されている。朱色で道が描かれているほか、川のうち右端の「大川」が、吉野川ないしはその一支流と考えられる。その西沿いの「道」は堤防と思われ、当時の開発のあり方がしのばれる。新嶋庄のうち枚方地区のみが描かれていて、現在の徳島市古川町または助任町付近にあたるなどの諸説がある。正倉院などに残された同種の地図約30点とともに、全国的にみても最古に位置づけられる。



② 阿波国名方郡大豆処図 【写真/徳島大学総合科学部蔵, 原本;29cm×52cm/正倉院蔵】

年紀はないが、①と同様に8世紀頃に作成された地図。東大寺領新嶋庄のうち大豆処地区のみを描く。「大川」が吉野川またはその支流にあると判断されるが、①と違って南北に流れており、流れの渦や2羽の鳥も描かれている。右上に「合壺拾町」(約10)とされ、内訳として畠約6町と4町強の「川成」が示されている。絵図内部を見ると、「川成」すなわち川が拡大した部分はいずれも「大川」の東岸にあたることがわかる。写真では不分明だが、うしろの鳥の付近より南は狭い川幅で一旦描かれたのち、西岸側を広げて描いたあとがみられる。川の乱流と結び付ける解釈も成り立つ。「大豆処」の具体的位置は、徳島市国府町北部付近、第十堰北部付近とする諸説がある。



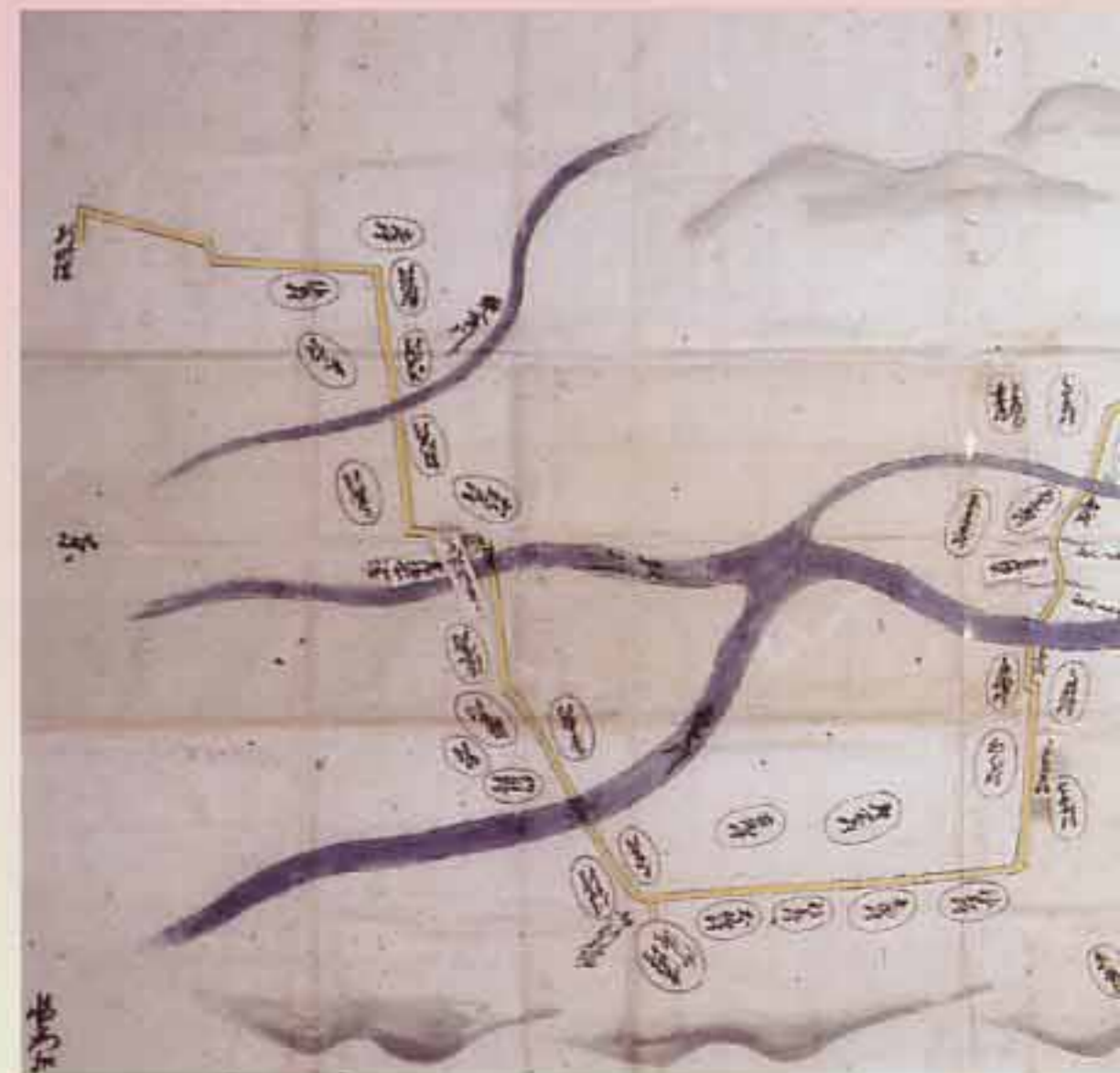
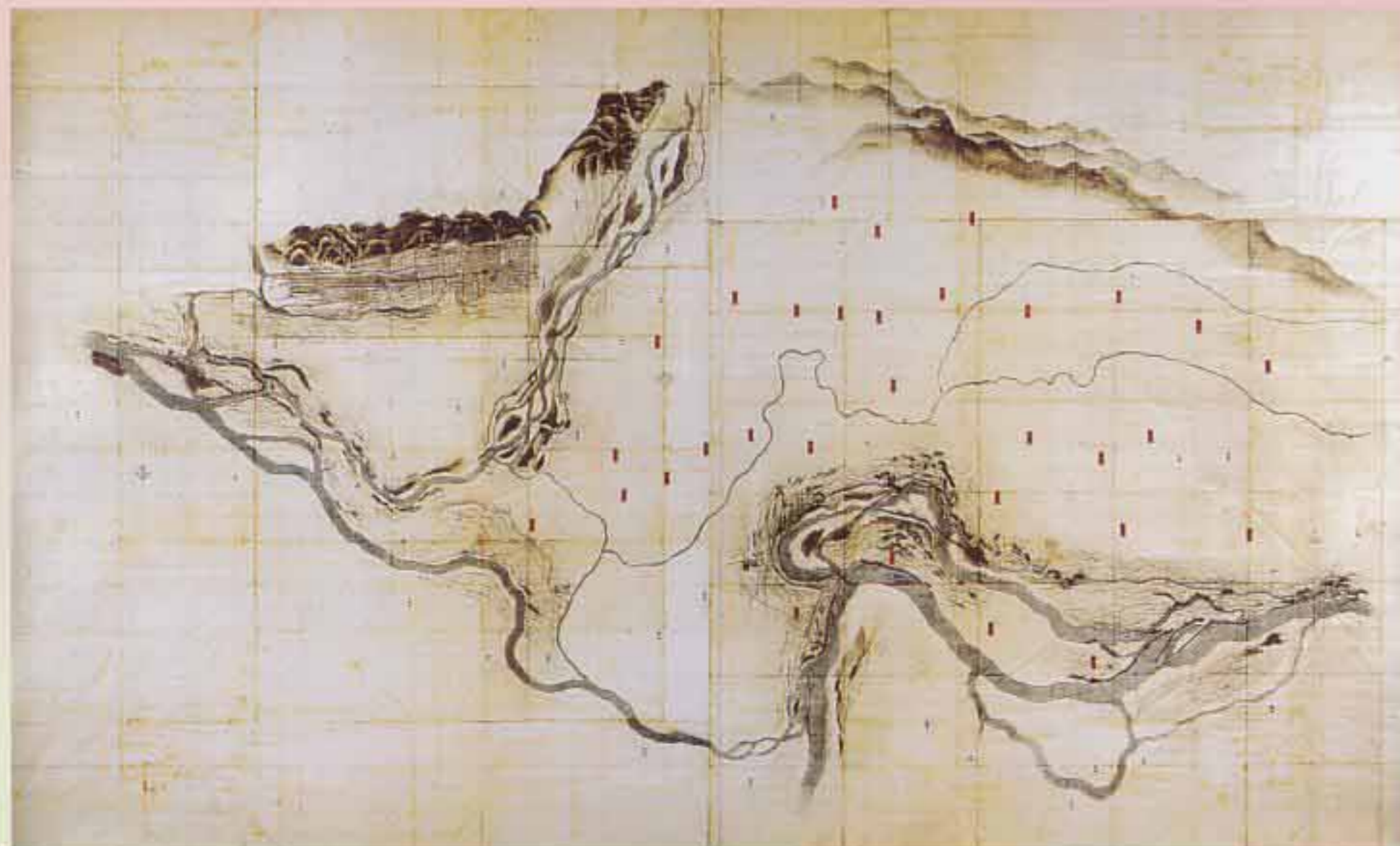
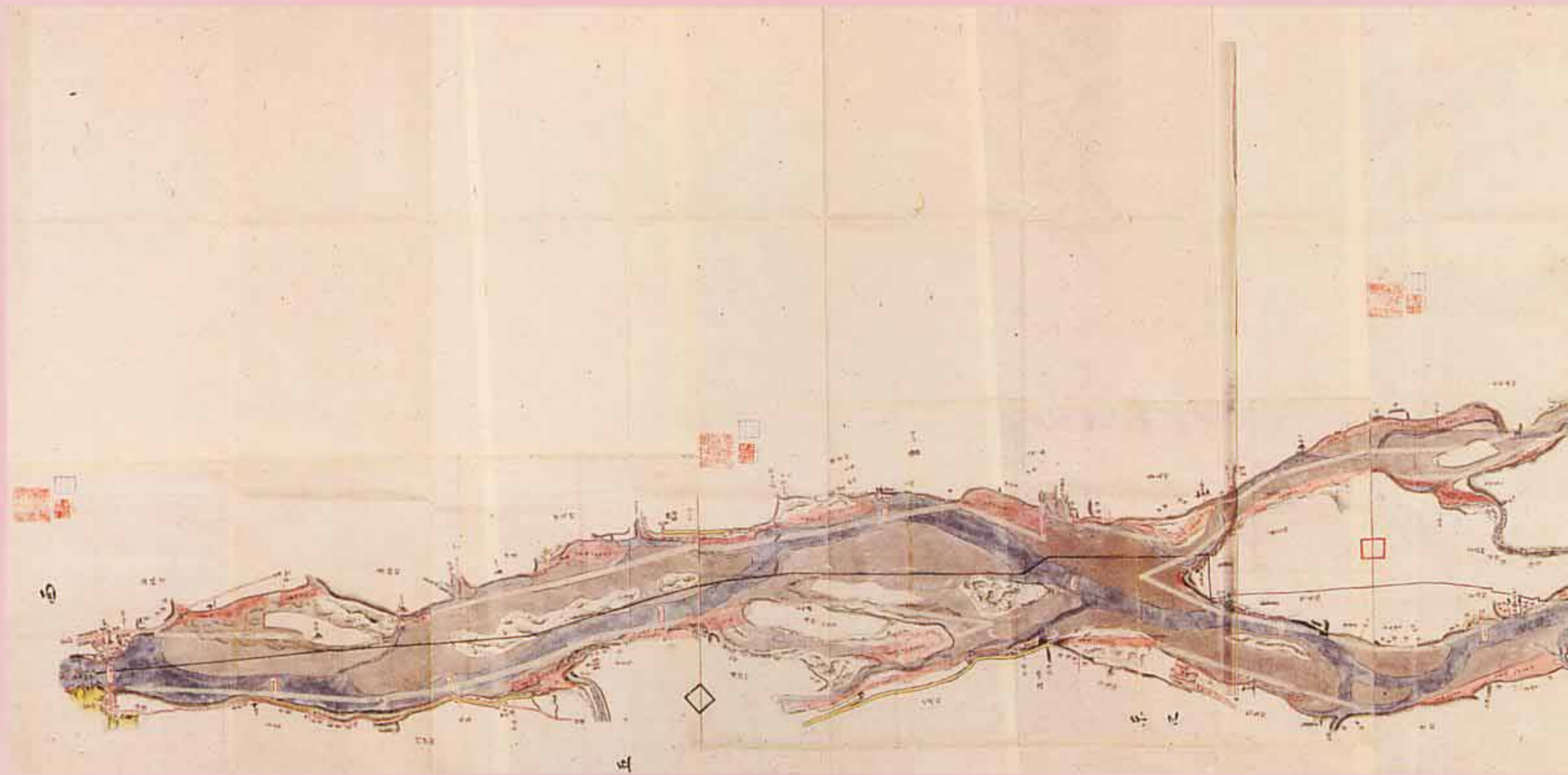
③ 池辺真榛『古文書集』 【原本;26cm×18cm/小松島市教育委員会蔵】



幕末の国学者、池辺真榛は徳島藩士樋口藤左衛門の長男として生まれ、大坂で学んだ後、郷里に戻った。各所の資料を書き写した『古文書集』全五冊の中に新嶋庄図、大豆処図も所収されている。①や②の原本は正倉院宝物であり、年1回奈良で開催される正倉院展でも展示される機会はないので、今回の展示は写真ではあるが、原本と筆写とを比較できる好機である。原本の写真と見比べてみると、文字の大きさが少々異なっていたり、①の新嶋庄図では「卅一町五十歩」の「一」の字が抜けていたりもする。②の解説でも指摘したように原本自体に加筆があるから、原本と筆写の相違は今後の課題となるだろう。

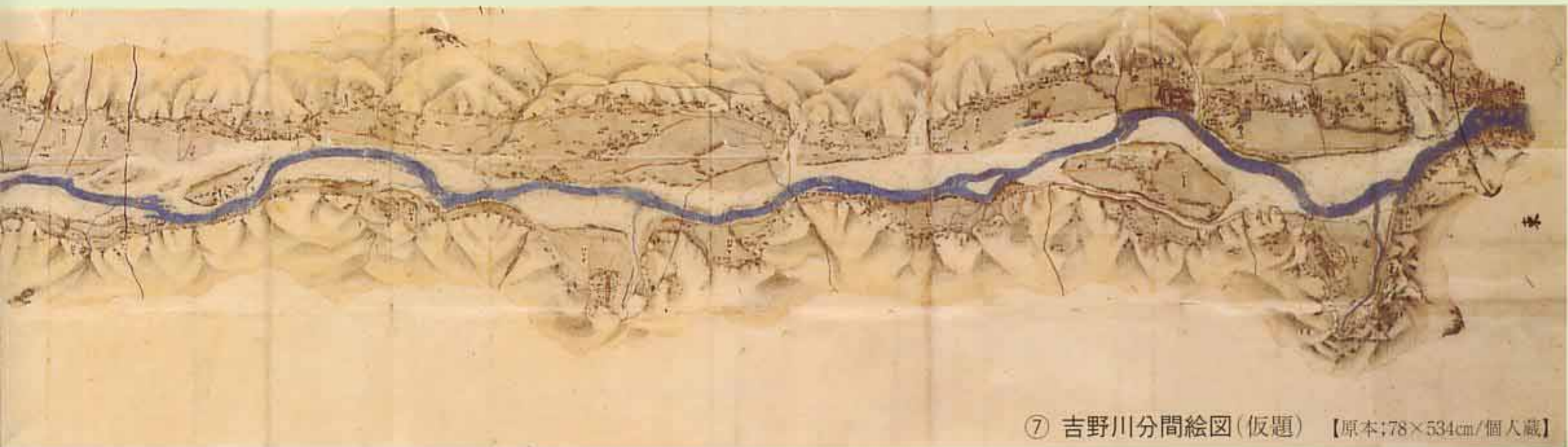


江戸時代の河川



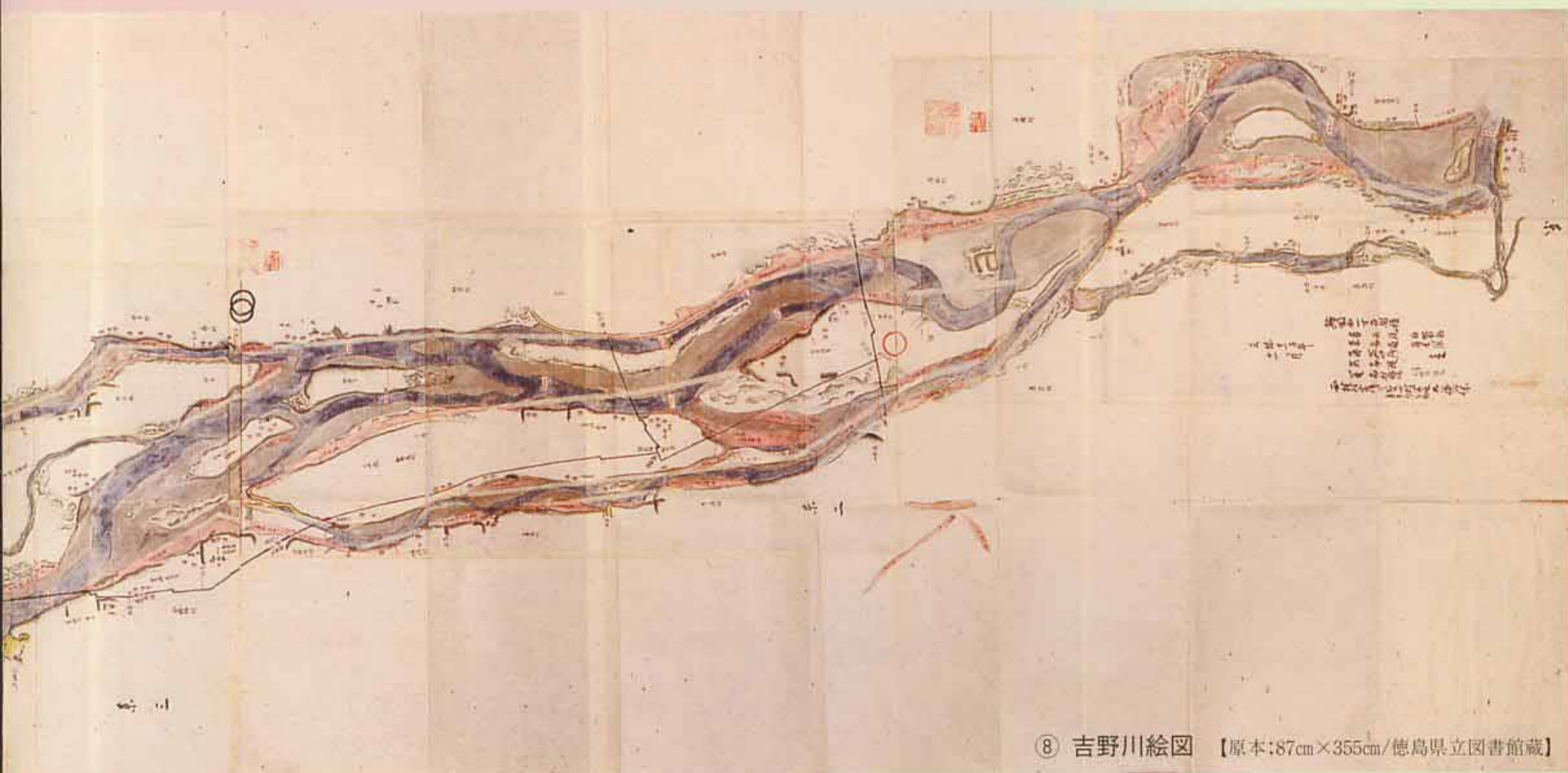
⑨ 村々沼川堰留之図 【複製;写真/本館蔵, 原本:228cm×376cm/国立史料館蔵】

⑩ 吉野川沿岸御巡村

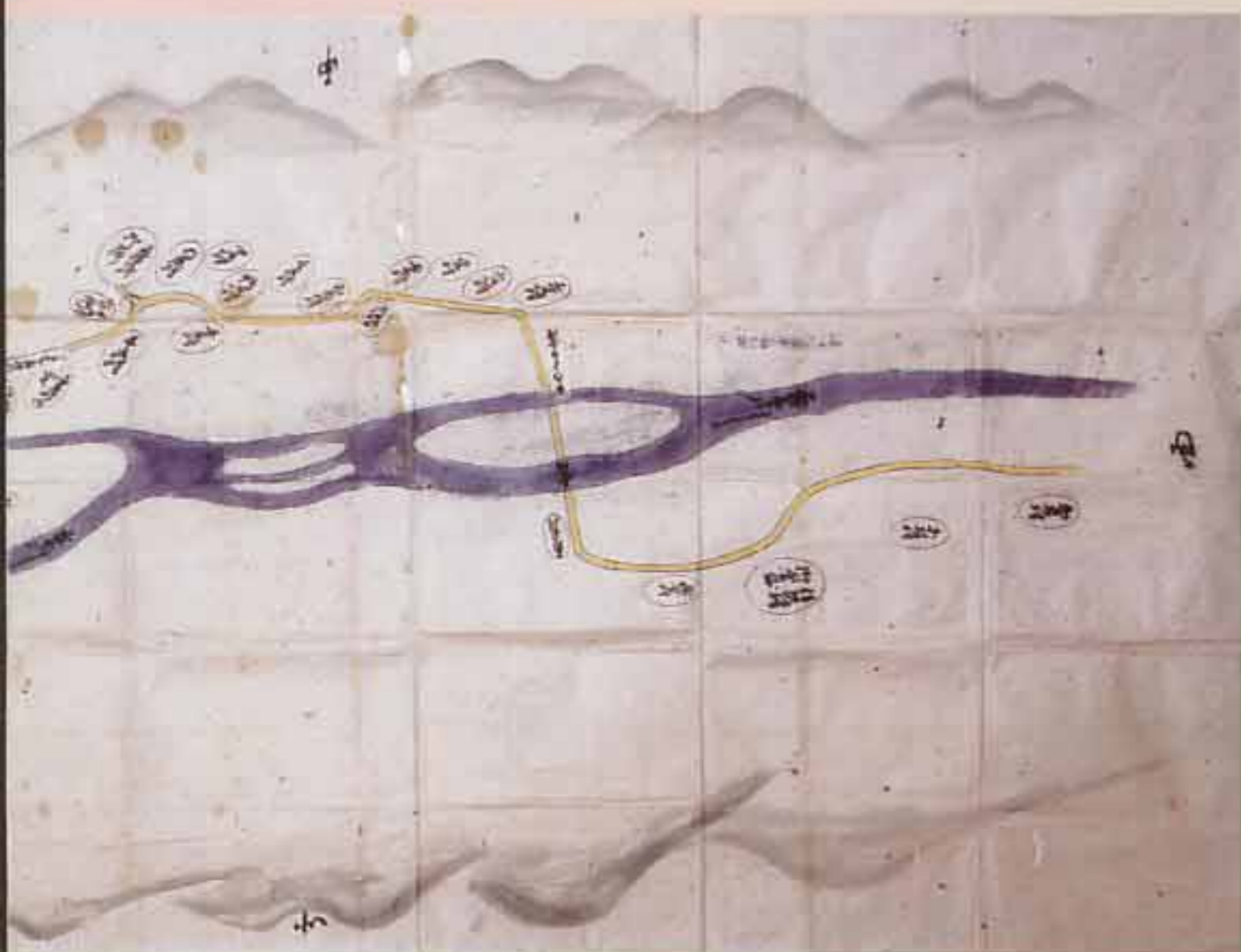


⑦ 吉野川分間絵図(仮題) 【原本:78×534cm/個人蔵】

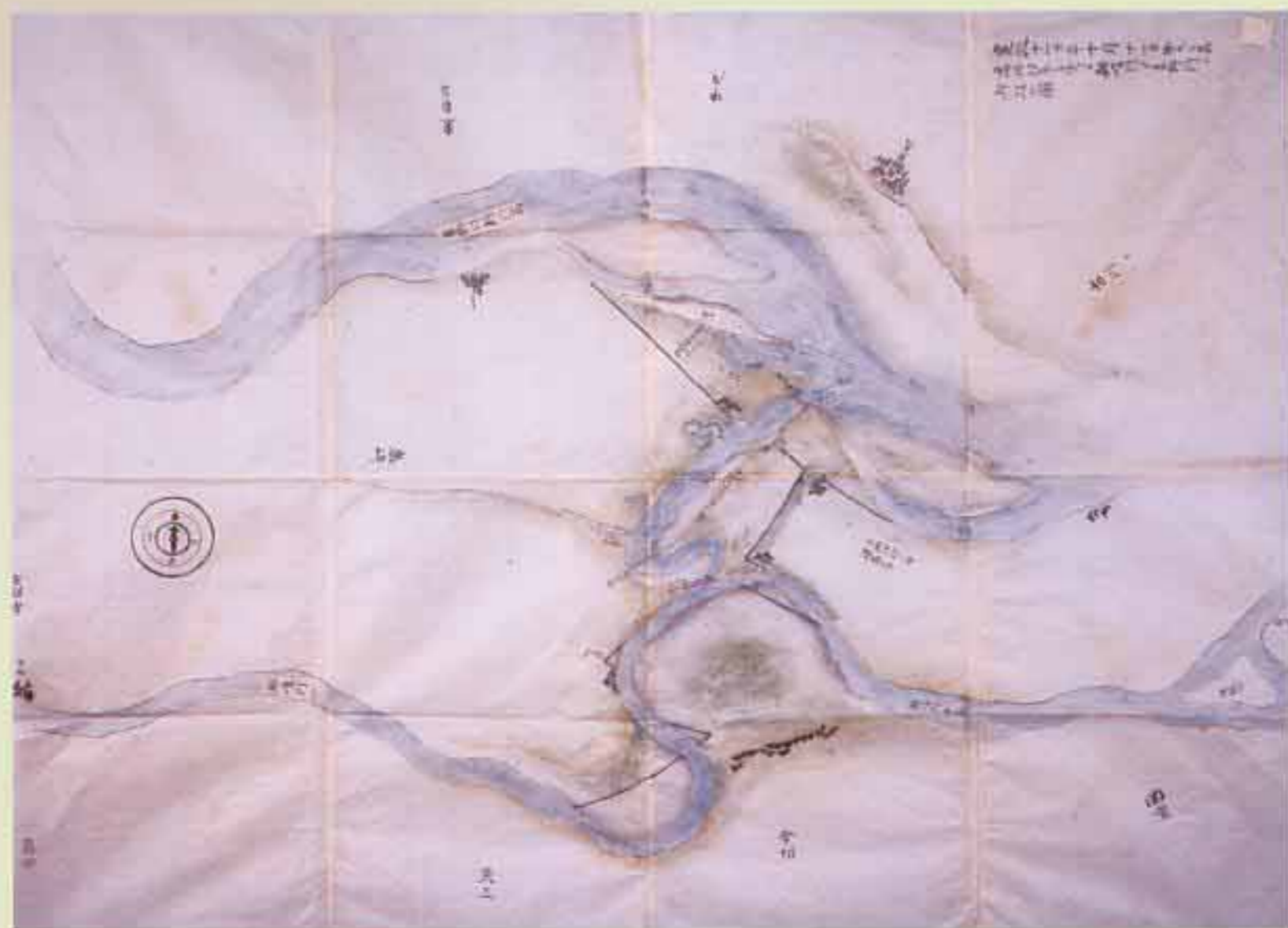
絵図にみる吉野川



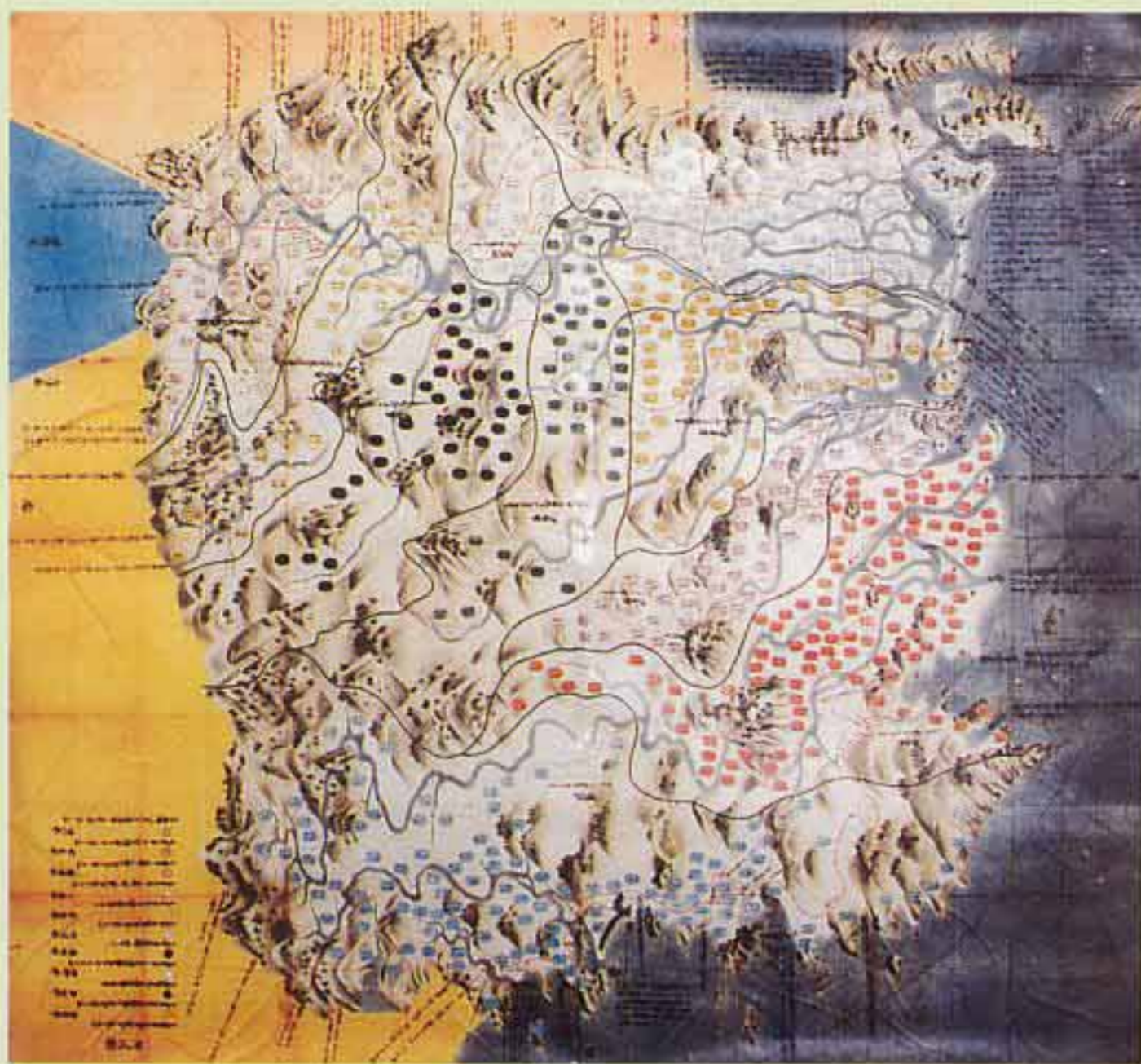
⑧ 吉野川絵図 【原本:87cm×355cm/徳島県立図書館蔵】



絵図(仮題) 【原本:68cm×160cm/個人蔵】



⑪ 名東郡高崎村新川之図 【複製;写真/徳島県立図書館蔵, 原本:106×77cm/国立史料館蔵】



④ 阿波淡路両国絵図 阿波国

【複製;写真/本館蔵, 原本;275cm×200cm/国立史料館蔵】



⑤ 阿波国大絵図

【複製;印刷/本館蔵, 原本;425cm×504cm/徳島大学附属図書館蔵】

④ 阿波淡路両国絵図 阿波国

江戸幕府は慶長、寛永、正保、元禄、天保年間の5度、諸国の大名に命じ、各国の絵図を作成した。さらに、寛文年間(1666~1676)には明暦の大火(1657年)で焼失した正保国絵図の再提出を命じており、本絵図はそれにあたるおもわれる。表題の両国とは、蜂須賀氏が統治していた阿波国と淡路国とをあわせて指している。絵図内に散らばる楕円の中に村名・石高が記され、郡ごとに色分けされている。国全体の形は、紙面にも制約され、ほぼ真四角となっている。すなわち、吉野川流域の東西幅が窮屈に表現されている一方で、下流域が極端に詳しく描かれている。

⑤ 阿波国大絵図

元禄期に作成された阿波国絵図。作成にあたって幕府から国境の確定が命じられ、隣接する3ヶ国との国境を調査したおりの絵図も残されている。これ以前の国絵図で阿波国は、北の方が長いが、④のように南方がせいぜい東西幅と同程度に描かれているが、本図では6寸1里(21,600分の1)に縮尺も規定されて、精度が格段に高まったことがよくわかる。吉野川流域を④と比較すると、城下町徳島の位置する下流域が極端に詳しく、歪みもなくなっている。その一方、理由は不明ながら、北岸(讃岐山脈)側の支流が間引いて描かれている。

⑥ 吉野川大綱絵図〈表紙〉

吉野川源流域である土佐国瓶ヶ森山(高知県)から阿波国(徳島県)の大歩危付近までを描いた河川絵図で、兩岸の山地は上下に展開されている。水流は白色の顔料である胡粉で表現され、河水は青色、山

の松は緑色の岩絵具が用いられていて、絵画的な見取絵図である。

⑦ 吉野川分間絵図(仮題)

現在の池田町三縄から、美馬郡と阿波・麻植両郡境の岩津までの吉野川を描いた分間絵図。分間絵図とは実測に基づいて描かれた絵図で、本図の縮尺は約7,500分の1である。ただし、山側は景観表現されている。上流側には磁石の方位を型どった合点があるので、三縄より上流部も作成されたと推定される。

川中には渡場や瀬の名が詳細に書き込まれており、村名および薄墨線で村境が表示されている。脇町付近で吉野川は現河道よりも北側により、卯建(うだつ)の商家が建ち並び、舟着場があった南町側によっていたことがわかる。

⑧ 吉野川絵図

吉野川中流域の岩津から第十堰までの約24kmを描いた絵図。100間(約180m)が絵図面1寸(約3cm)に縮尺された約3,600分の1の実測図。「黄筋」で示された連続堤は図中に9ヶ所あり、その間は竹植堤となっていて、河水のぶつかる攻撃斜面には石堤も施されている。川中には水制施設も点在する。

「丑春柳植付桃色」と追記され、本図作成の翌天保12年(1841)に洪水対策として柳が植え付けられた範囲が、その反別とともに桃色で着色されている。最下流側には、第十堰が一部示されている。

⑨ 村々沼川堰留之図

絵図を仕立てる際に用いられる系(升目、方2寸)や方位記号を示した縮尺約5,000分の1の分間絵図。吉野川本流や支流の鮎喰川、神宮入江川には竹堤や石

堤、さらには間数(長さ)を記した「関流」、「関留」、「逆関」などの水制施設が詳細に図示されており、治水を目的に作成されたと推定される。

第十堰は長さ約200間(約360m)の刎関として表現され、下流側では、当時の吉野川本流(現在の旧吉野川)は太く、別宮川(現在の吉野川)は細く描かれている。なお、本図には高崎村付近の「新川」(図⑩参照)がないので、寛政11年以前の作成と考えられる。

⑩ 吉野川沿岸御巡検絵図(仮題)

徳島城下から阿波郡西林村までの御巡検行程を表にしたとみられる見取り絵図。板野郡吹田村および麻植郡麻植塚村には「御泊り」、阿波郡伊沢村には「御昼休」と付記され、「御茶屋」や「御制札場」なども図示されている。渡河地点については「舟渡」がしるされ、図中央付近の吉野川と神宮入江川とに挟まれた地域については、「出水之節舟渡」と付紙で注記されている。東覚円村の下流側で「吉野川」(現在の旧吉野川)と「新川」(別宮川、現在の吉野川本流)とに分流しているが、第十堰は示されていない。

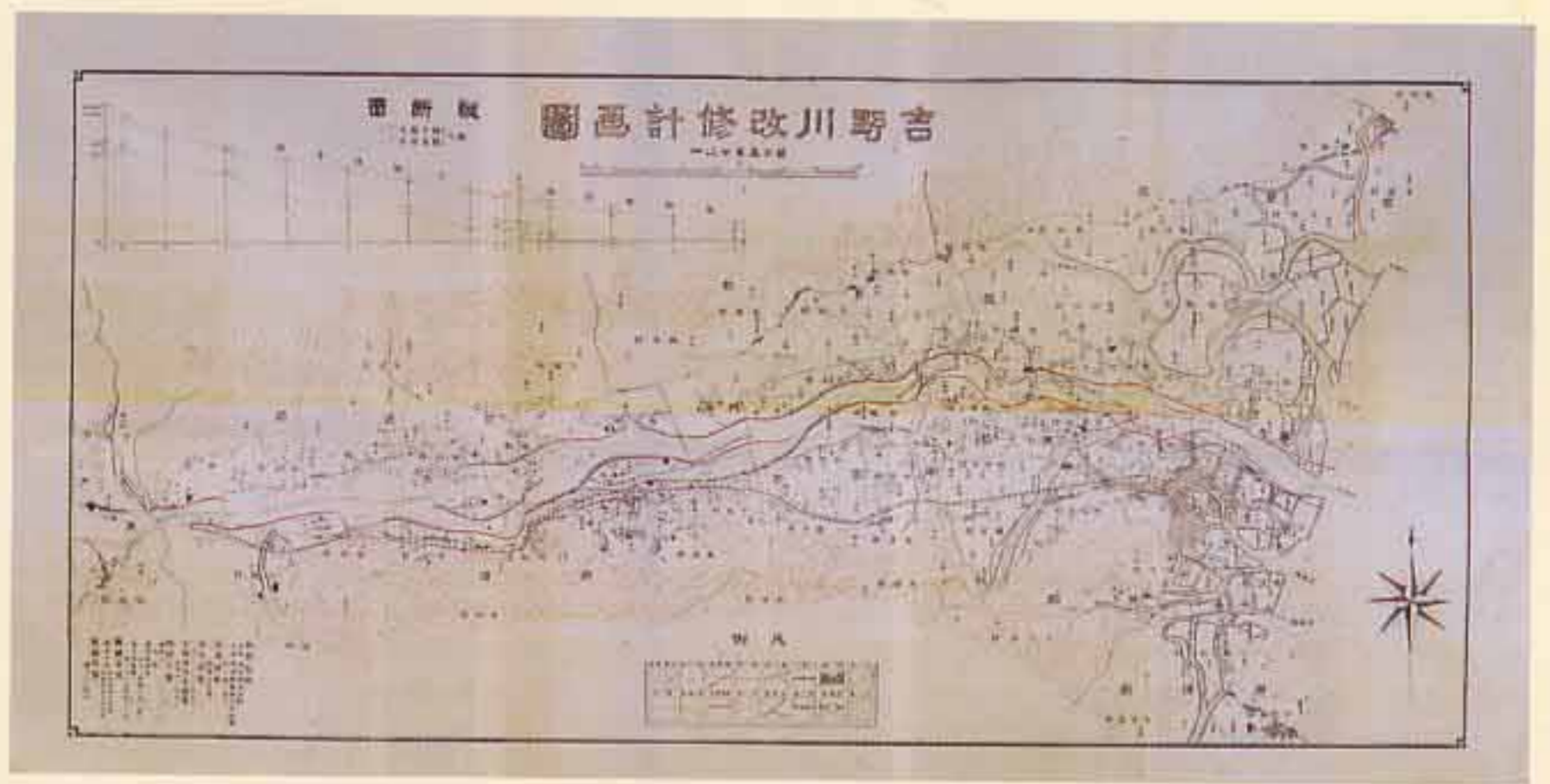
⑪ 名東郡高崎村新川之図

徳島市不動東町付近の鮎喰川河口部を示した絵図。今日、鮎喰川はJR高徳本線下流側で飯尾川を合流してのち、吉野川に直接注ぎ込んでいるが、寛政年間当時、鮎喰川は最下流部で大きく蛇行していたことがわかる。

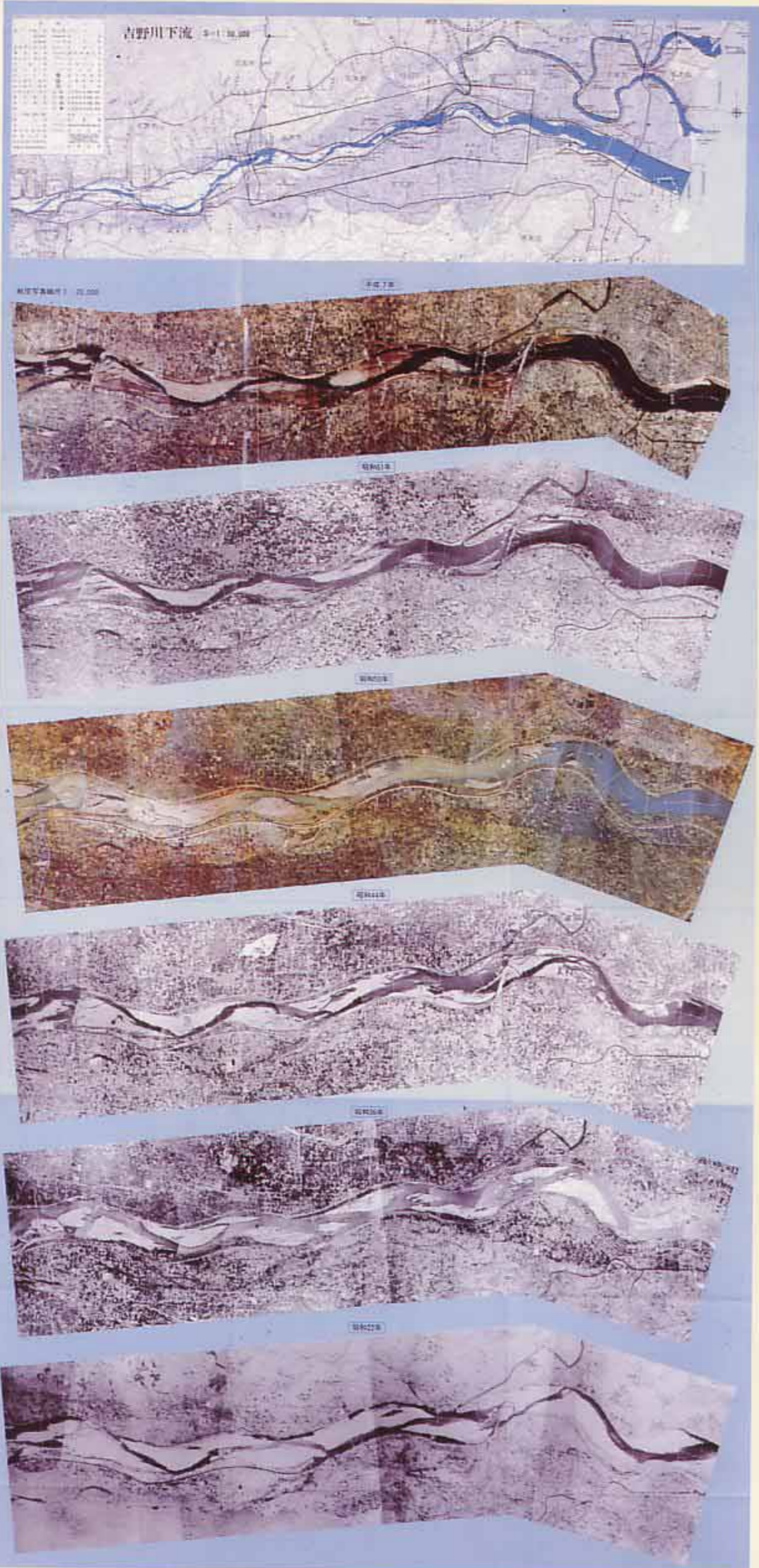
本図は寛政11年(1799)10月11日の洪水によって、鮎喰川の蛇行部が破堤し、吉野川へ水流が押し抜いた状況を示している。この「新川」部分は明治中頃の地形図でも確認できる。



⑫ デ・レーケ「吉野川検査復命書」(復刻版)付録地図
【39cm×54cm/建設省徳島工事事務所蔵】



⑬ 吉野川改修工事計画図 【複製:50cm×98cm/建設省徳島工事事務所蔵】



⑭ 吉野川第十堰周辺航空写真 【187cm×88cm/建設省徳島工事事務所蔵】

明治以降

近代工法による吉野川治水のはじまり

⑫ ヨハネス・デ・レーケ「吉野川検査復命書」(復刻版)付録地図

明治政府のお雇い外国人で、日本の治水事業に大きな貢献をしたオランダ人ヨハネス・デ・レーケは、明治17年(1884)徳島を訪れ、吉野川の治水調査を実施し「吉野川検査復命書」を作成した。その内容は吉野川上流から河口に至るまでの詳細な地形の特色と治水対策上の問題点を述べている。第十堰についてはその撤去による得失を論じているが、吉野川の主流を旧吉野川から現在の流路に変更することを主張した。復命書の原本(オランダ語および翻訳原本)は現在のところ未発見であるが、本図は昭和33年(1958)に復刻された翻訳本の付録である。

⑬ 吉野川改修工事計画図

吉野川の流路は、さまざまな絵図にみるとおり固定せず、流域の住民は洪水のたびに大きな被害を受け、悩まされた。明治18年(1885)国営直轄工事による改修工事が開始されたが、大洪水による被害のため県議会の反対決議が行われ中断された。現在にみる吉野川の連続堤防は明治40年(1907)に着手し、昭和2年(1927)に完工されたものであり、本図は第一次改修工事の計画図である。

⑭ 吉野川第十堰周辺航空写真

吉野川下流域の第十堰周辺の航空写真の変遷図である。現在第十堰の改築をめぐる大きな論議がわき起こっている。第十堰は歴史的には旧吉野川への流量を多くするために築造され維持されてきた利水のための堰である。河川の役割は時代の変化とともに移りかわる。自然環境の保全と流域住民の安全とをどのように両立していくかが、いま問われている課題であろう。

展示目録

- | | |
|---|-------------------|
| ① 正倉院蔵 阿波国名方郡新嶋庄図 [複製;写真] | 天平宝字2年(758) |
| ② 正倉院蔵 阿波国名方郡大豆処図 [複製;写真] | 年不詳<同上年頃か> |
| ③ 小松島市教育委員会蔵 池辺真榛『古文書集』所載/新嶋庄・大豆処絵図 | 年不詳<近世後期> |
| ④ 国立史料館蔵 阿波淡路両国絵図 阿波国 [複製;写真] | 年不詳<寛文年間か> |
| ⑤ 徳島大学蔵 阿波国大絵図 [複製;印刷物] | 年不詳<元禄13年(1700)か> |
| ⑥ 個人蔵 吉野川大綱絵図<前期展示> | 年不詳<近世期> |
| ⑦ 個人蔵 吉野川分間絵図(仮題)<後期展示> | 年不詳<近世後期> |
| ⑧ 徳島県立図書館蔵 吉野川絵図 | 天保11年(1840) |
| ⑨ 国立史料館蔵 村々沼川堰留之図 [複製;写真] | 年不詳<近世後期> |
| ⑩ 個人蔵 吉野川沿岸御巡見絵図(仮題) | 年不詳<近世後期> |
| ⑪ 国立史料館蔵 名東郡高崎村新川之図 [複製;写真] | 寛政11年(1799) |
| ⑫ 建設省徳島工事事務所蔵 ヨハネス・デ・レーケ『吉野川検査復命書』(復刻版)付録地図 | 明治17年(1884) |
| ⑬ 建設省徳島工事事務所蔵 吉野川改修工事計画図 [複製] | 明治40年(1907) |
| ⑭ 建設省徳島工事事務所作成 吉野川第十堰周辺航空写真 | 平成7年(1994) |



⑥ 吉野川大綱絵図 【原本;36cm×181cm/個人蔵】